第16回

「荻窪の記憶」こぼればなし

汽笛と武蔵野

前号では、天沼に住んでいた徳川夢声と中央線の汽笛にまつわるちょっと苦い思い出を紹介しましたが、蒸気や空気によって音を出す汽笛には、記憶や懐かしさを刺激する特別な力があるようです。そこで、今回は、「咽び泣くような」ともいわれる船の汽笛について書いてみたいと思います。個人的な話で恐縮ですが、子供の頃に四谷の町で聞いた汽笛を思い出したからです。

それは、たまたま手にとった雑誌で、「四谷の上空より東京湾を望む」という空撮写真を眺めていたときのことでした。写真の中央には赤坂離宮の緑が広がり、その先に虎ノ門や新橋の超高層ビルが林立していますが、そのビルとビルの間で光っているのは海。四谷と東京湾はこんなに近かったのかと、改めて気づいた瞬間、「ボオーッ」という懐かしい汽笛の音が脳裏に蘇ってきたのです。昭和20年代から30年代のはじめにかけては、都心でもビルはまだまばらで、音の伝播を妨げるものが少なかったからでしょう。霧の出た朝などは、四谷でも東京湾の船が鳴らす汽笛がよく聞えたのです。

当時、ラジオから繰り返し聞えてきた歌に『上海帰りのリル』がありました。もちろん、子供には上海がどこあるかもわかりません。それでも、謎めいた女性のイメージと、町を覆う霧、むせび泣くような汽笛とが重なって、子供心にも旅情をかきたてられたことを覚えています。

ところで、そんな船の汽笛が荻窪でも聞えたといったら、みなさんは信じるでしょうか。井伏鱒二は、『荻窪風土記』の冒頭で、こんな古老の話を紹介しています。

「弥次郎さんの話では、関東大震災前には、品川の岸壁を出る汽船の汽笛が荻窪まで聞えてゐた。ボオーッ……と遠音で聞え、木精（こだま）は抜きで、ボオーッ……とまた二つ目が聞えてゐた。（略）荻窪から品川の岸壁まで、直線距離にして四里内外である。汽笛の音の伝播を妨げるものは、当時としては武蔵野の名残をとどめるクヌギ林のほか、ケヤキの大木、ヒノキの森、スギの密林ぐらゐのものだろう」

まるで、東京湾の西に広がる武蔵野台地を「鳥の目」で俯瞰しているような気分になりますが、これも、空気の振動によって伝わる汽笛を通した空間把握のなせる業でしょう。

寝静まった夜中に聞こえる夜汽車の音、除夜の鐘、豆腐屋の喇叭、ラーメン屋のチャルメラ……。懐かしい音たちは、いったい、どこに行ったのでしょう。

「荻窪の記憶」プロジェクト　松井和男